

大分市教育センター 研究報告会

平成27年 2月18日

長期研修生 大分市立野津原中学校 岩崎静枝

<研究主題>

中学1年生における読む力の基礎を養うための指導の工夫

～フォニックスの活用を通して～

1 はじめに

大分市小中一貫教育校賀来小中学校で小学校1年生から6年生までの教科としての英語科の教育課程の編成及びその実施に関わる中で、小学校へのアルファベットの指導をどうするかが重要なポイントの一つであった。

中学校では、これまでアルファベットの文字の名前、書き方、単語の中での読み方をほぼ同時に習得しなければならず、そのことが生徒のつまづきの原因の一つではないかと感じていた。そこで、その解消を図るとともに児童に過度の負担にならないよう、1年生から段階的に文字指導を行い、6年生修了までにアルファベットの文字の読み書きができることを目標とした。

他の多くの小学校では外国語活動が導入され、音声を中心とした活動が行われている。生徒が音声に慣れているということ踏まえて、中学校では、文字への移行をより丁寧に行う必要がある。中学校の学習指導要領では音と綴りを関連づける指導が新たに指導内容に含まれた。小学校からなだらかに音から文字への移行をスムーズにする活動を組むことが必要だと考えられる。

英語は他のヨーロッパの言語と比べても、音と綴りの関係が複雑な言語である。「読めない単語は書けない」。音と綴りの関係を理解し、文字を音に直して読む力は、英語の基礎体力とも言える語彙力を身につけ、4技能をバランス良く高めるために必要な力である。

音と綴りの関係を学ぶ方法であるフォニックス (phonics)は、効果があるとされ、日本の中学校教科書等にも一部分取り入れられている。しかし、指導には十分な知識が必要であり、授業での扱い方についても、ばらつきがある状況である。そこで、このフォニックスについて、具体的な指導内容や指導方法を研究することにより、小学校外国語活動から中学校英語科へのスムーズな接続を図り、中学校での生徒のつまづきを減らすことができるのではないかと考えた。

2 研究主題

中学1年生における読む力の基礎を養うための指導の工夫
～フォニックスの活用を通して～

3 実態

中学校に入学した生徒の英語学習の実態について、大分市立野津原中学校の1年生に6月にアンケート調査を行った。

「英語の学習で楽しいことは」という問いには、「聞く」「話す」の音声の活動が64%である。小学校で学習した音声中心の内容が中学校で生かしていると思われる。一方で「読む」「書く」とい

った文字に関する学習も36%ある。理由には「書くより会話が楽しい」という言葉もあるが、「単語を覚えて書くのが楽しい」など「書く」ことについて、できるようになったことに達成感を感じ、意欲を持っていることがわかる。

一方で「英語の学習で難しいこと」については「書くこと」が45%と一番多い。理由としては「単語を覚えるのが難しい」が圧倒的に多い。小学校で英語の音には慣れてきているが、複雑な英語の音と綴りの関係を理解できずに困っている生徒が多いことがわかる。「聞くこと」について難しさを感じている原因は、中学校でのまとまりのある英文の内容を聞き取る活動にあると思われる。

実はこの「聞くこと」は英語の正確な音を理解することができていないと難しい。継続したトレーニングが必要な部分である。

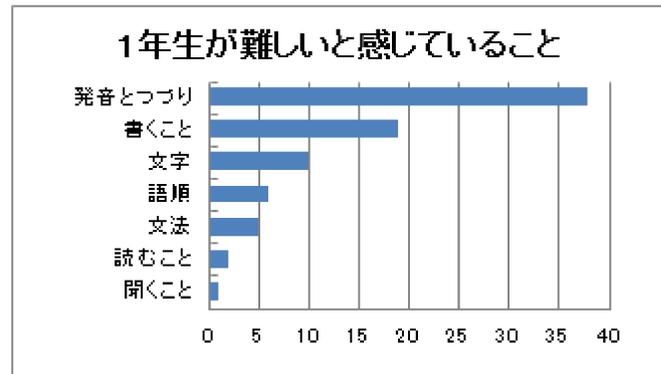
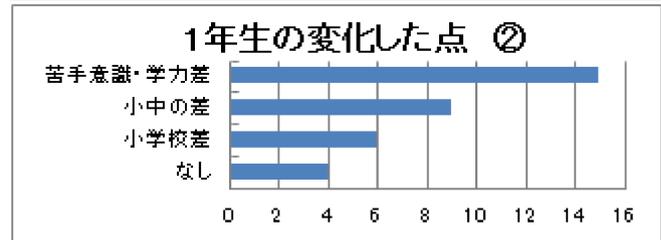
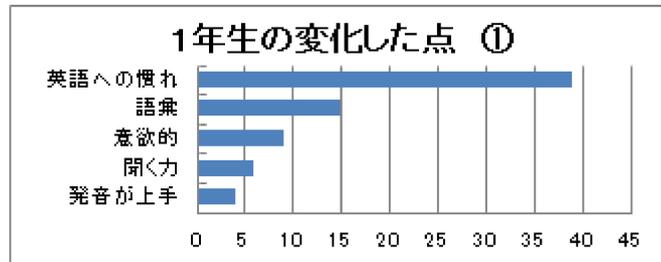
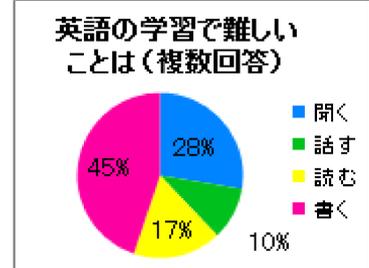
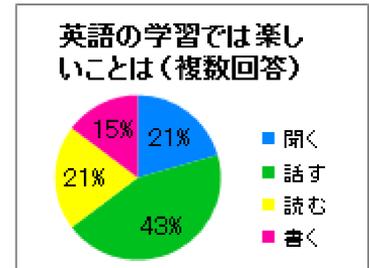
次に中学1年生の英語の指導について、大分市の英語科教員にアンケート調査を行った。

まず、小学校外国語活動を経験した生徒の「変化した点」については①にあるように、英語の音に慣れており、語彙もあり、活動などに意欲的であるという肯定的な変化が多く出された。小学校外国語活動での学びを、生徒が生かすことができていると考えられる。

一方で、②にあるように、小学校の段階で、既に苦手意識を持っていたり、また小学校ごとの指導の差、そして小中の指導方法の違いへの戸惑いなど、これまでにない課題への対応をせまられている状況がうかがえる。

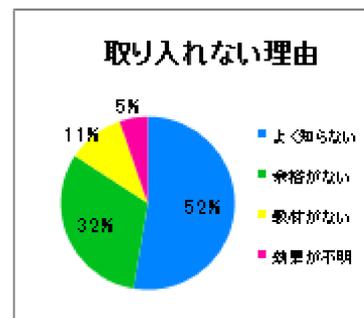
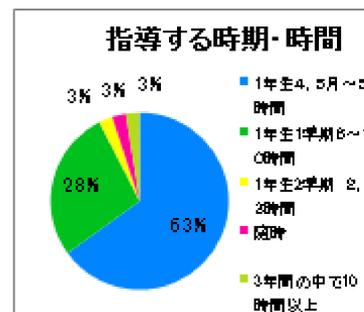
そして、中学校1年生が「難しいと感じていること」については「発音とつづり」に関すること、「書くこと」が多く、生徒自身の実感と一致している。ただ、生徒が「聞くこと」や「読むこと」を「難しいこと」に挙げているのに対して、指導者はそれらの面をあまり意識していないことがわかる。

次にフォニックスの扱いについてであるが、「フォニックスを指導に取り入れているか」について、「はい」が67%、「いいえ」が33%であった。平成27年度の全英連大分大会に向けた取組の一つにフォニックスの指導が入っており、全市で取り組めるよう資料が配付され



ていたことから、予想よりやや「はい」が上回った。「取り入れた理由」としては「読めるようになるから」がほとんどであった。しかし、実施時期を見ると4、5月が中心であり、これは、アルファベット導入と同時に、そのアルファベットではじまる単語とその音を組み合わせて練習するフォニックスアルファベットの指導であろうと推察される。自身もこれには取り組んで来たが、語彙のない時期でもあり、アルファベットを覚えさせることの方を優先させてきた感がある。

一方「取り入れない」理由としては「よく知らない」が半数、そして「教材がない」、「余裕がない」等、フォニックスとの関わりが少なく、知識や情報が不足していることが考えられる。実際、1学期の始めからの指導内容について授業研究等が行われることはほとんどなく、この時期の指導について情報を得る機会は少ない。これは、課題の一つである。



4 研究仮説

生徒の実態からは、小学校外国語活動で培った「聞く」「話す」力を生かして英語の授業を楽しんでいる様子が見えるが、「単語の綴りを覚えて書くこと」に難しさを感じており、音は解っているが、綴りと関連づけることがうまくいっていないことがわかる。

教員への調査では、半数以上がフォニックスを扱っているが、時期や内容にばらつきがある。フォニックスになじみがないこと、そして授業進度や教材研究の問題から指導をためらう様子が見える。そこで次のように仮説をたてた。

中学校1年生の読みの指導において、フォニックスを効果的に取り入れることにより、音と綴りの関連に気付かせ、生徒に英語を読む力の基礎を身につけさせることができるであろう

5 研究の実際

(1) フォニックスについて

「"ghoti"と書いてなんと読むか—答えは fish である」というのは英国の劇作家バーナード・ショーが書いたとされる、英語の音と綴りの複雑さを扱ったジョークである。

英語は他のヨーロッパ言語と較べても、音と綴りの関係が複雑な言語である。その理由としては、ラテン語、フランス語の影響、そして大母音推移と言われる母音の変化、他言語からの借入語の多さ等、いろいろある。様々な音の変化が綴りに反映されず、整理されることもなかったことが、英語の音と綴りの複雑さを生んでいる。ネイティブスピーカーの子どもたちにとっても、読み書きを修得するのは決して容易ではない。

フォニックス (phonics) は、19世紀中盤にアメリカで子どもたちに音と綴り字の関係を教える方法として始まった。フォニックスとは、英語のアルファベットのそれぞれの文字が単語の中でどう読まれるか、また複数の文字が組み合わさったときどう読むかについて、ある程度規則性

の見える読み方のルールを子どもに教えていく方法である。英語にはこのフォニックスのルールの例外も多く、これで本当に教えられるのか、という議論が起こった。その後他の指導法が主流となった時期もあったが、1950年頃から再び見直されるようになった。1980年代から、フォニックスと対立したのがホール・ランゲージという指導法である。まず、英文を全体から理解し、単語を絵のように認識してから部分を確認させた方が有効だという考え方である。アメリカではこの2つの指導法についての激しい論争が巻き起り、ようやく1998年に、米国学術研究会議が「子どもたちに読み方を教える方法としてフォニックスが有効である」と結論づけた。現在は英語圏で、小学校入学前から低学年の子どもたちに広く使用されている指導法であり、特に学力の低い子どもたちに有効であるとされている。

英語は、このように1世紀以上に渡って指導法の議論が熱心になされるほど、読み書きの難しい言語であると言うことを、指導者は十分意識する必要がある。英語圏では、ディスレクシアの発現率が1割から2割程度と多く、音韻認識が原因であることが多いと言われる。日本語の場合のディスレクシアは英語とは違うタイプとされる。日本語は音韻認識障害が顕在化しにくく、比較的ディスレクシアが発現しにくい言語であるとされるが、英語学習を始めたことで顕在化する可能性があるという。こういった学習障害の子どもに対してもフォニックスは有効であると考えられている。日本での英語のディスレクシアに関しては研究があまりされておらず、資料が乏しいため、実態はよく分かっていないが、指導者が留意すべき点ではあると思う。

フォニックスのルールは統一はされておらず様々な分け方がある。細かく分類すると100個にもなり、全てを教えるとする逆とそのルールを覚えることの方が負担になる。もともとネイティブスピーカーのための方法である。生活の中で文字にも触れており、音声での語彙が十分ある子どもであれば、ルールを知って「ああ」と思えるだろう。しかし、一般的な日本の中学生の英語の語彙は少なく、ある程度の語彙がないと十分効果が発揮できないと考え、扱う時期についても検討する必要がある。また、英語の教科書の最初の方に出てくる基本的な語彙にはフォニックスルールの例外が多くあり、それらの指導方法についても考える必要がある。

(2) 授業実践に向けて

フォニックスについて学んだ内容をもとに、実践に向けて①フォニックスルールの絞り込み②教材の作成③指導計画作成を行うことにした。

①フォニックスルールの絞り込み

ルールを以下のように大まかに18種類に分け、中学校1年生の教科書に出てくる645個の単語がどれに当てはまるかを出現順に分類していった。

<教科書単語分析のためのフォニックス分類>

1, 単音	7, 子音ダイグラフ①	13, 子音ブレンド①
2, 子音+母音+子音	8, 子音ダイグラフ②	14, 子音ブレンド②
3, サイレント e	9, 子音 c,g	15, 母音+r
4, 子音+母音	10, 母音ダイグラフ①	16, 黙字
5, 母音+子音	11, 母音ダイグラフ②	17, ルールの例外
6, 子音+母音+子音+子音	12, 母音ダイグラフ③	18, その他の単語

表の1は基本となるそれぞれの文字単独の音である。2～6はaeiouの5つの母音の2種類の読み方に関するものである。2はcatのような単語で中の母音は/æ/と短音になる。3はmakeのような「子音+母音+子音+e」の形で中の母音は/ei/と長音になる。最後のeは発音されないで、サイレントeと呼ばれる。4はsoのような単語で、後ろの母音は/ou/と長音になる。5はatのような単語で前の母音は/æ/と短音になる。6はhandのような単語でこの場合も中の母音は短音である。7, 8の子音ダイグラフは子音2文字で別の読み方をするthreeのth/θのようなもので、数が多いので2つに分けて整理した。9のc,gについては子音であるが2つ読み方がある。例えばcはcat, niceのように、/k/, /s/と全く違う2種類の読み方をする。10, 11, 12の母音ダイグラフはteamのea/i:/のように、母音2文字で決まった別の読み方をするものであり、これも多いので3つに分けた。13, 14の子音ブレンドはtreeのtrのように母音を挟まない子音の連続音である。15はpark/ɑ:r/のように母音の後ろにrがつく形の単語である。16はnightのghのように発音しない文字で黙字という。17はcomeのように1～16のルールと同じ形をしているが発音が違う例外、18は設定したどのルールにも該当しないものである。

複数のルールがあてはまる単語も多く、また例外が多い場合をルールとしてどう見るかなど、分類は予想以上に難しかった。判断に迷う単語はフォニックス関連の書籍を参考に進めていった。そして、ルール別、単元別の一覧表を作り、そこからどのルールまでを扱うか、またどの段階でルールの指導を行うべきかを検討した。

まず、生徒が学習してすぐ使うチャンスがなければ定着しにくいと考え、フォニックスルールの中から、特に1年生の間に当てはまる単語の少ないルールを除外し、また単語の出現頻度を調べ、出現頻度の高いルールを絞り込んでいった。12種類まで絞ってみたが、「英語が苦手な生徒への効果を考えると、まだルールが多すぎるのでは」、という助言を大分大学の御手洗准教授にいただき、ルールの有用性と、生徒の覚える負担とのバランスを考えて、9種類に整理した。それらのルールを、発音練習の順番や、当てはまる単語の教科書での出現順を考え、最終的に以下のような順番に並べた。

<フォニックスルール>

	ルール	ルールの内容
1	子音1	基本の音 いとこ子音 pb td fv sz ckg
2	母音1	基本の音 母音 aeiou 短音
3	子音2	基本の音 子音 l r m n j h w y x q
4	母音2	基本の音 母音 aeiou 長音
5	サイレントe	子音+母音+子音+eの単語では、中のaieuoの音はアルファベットの名前で読んで、最後のeは読まない。
6	子音ダイグラフ	2つの子音で一つの音 th ch sh wh ng
7	母音+r	ar 明るい「アー」 er ir ur 「暗いアー」 or 「オー」「暗いアー」
8	母音ダイグラフ1	ee ea ay ai は前の母音だけ、アルファベットの名前で読む。「礼儀正しい母音」
9	母音ダイグラフ2	oo 「ウ」ウー ow 「オウ」「アウ」 ou 「アウ」 au aw 「オー」

この作業をする中で、フォニックスを指導するには、指導者に英語の正確な発音についての知識が必要であると感じた。「発音は気にしなくても」という意見も聞かれるが、今後一定以上のレベルの英語力を目指すのであれば、より正確な発音が重要になってくる。

②教材の作成

・フォニックスプリントの作成

フォニックスルールの1～9に基づいて、指導用のプリントを作成した。通常フォニックスは英語学習の入門期に指導されることが多い。それは、発音練習やアルファベットを覚えることと同時であり、生徒に負担が大きいのではないかと感じていた。また、ルールを教え込むのではなく、既習の語彙から推測させる形で帰納的に学習させていくことで、自分から読んでみようとする意欲を持たせたいと考えた。それにはある程度の語彙が必要になる。当初は、2学期での指導も検討したが、フォニックスの一覧表で、Lesson 4から新出単語がかなり増えることが分かり、1学期の後半、Lesson 3のあとに指導するのが効果的ではないかと考えた。

そこで、教材に使用する語彙は、Lesson 3までの既習語彙と小学校外国語活動の教材であるHi, friends!の語彙から、発音しやすいものを選び出していった。プリント教材は全部で17枚。1～9はフォニックスルールの内容、10からは定着と確認のための聞き取りテストを3枚と文字と音のパーツを使って単語を作るプリント1枚、聞き取りの原稿と解答のプリントを4枚作成した。1度にたくさんよりも、少しを繰り返すことに意味がある。また、あまり時間のかかる内容では、教科書が進まず、継続して指導ができないので、1枚を扱う時間は10分程度と考えている。

<フォニックスプリント1>

Phonics 1 CAB

基本の音
①いとこ子音 発音の仕方が似ているペアだよ!

p b 唇を閉じてスイカの種を飛ばす感じで「プッ」「ブッ」

t d 前歯の裏に舌を押し当ててはじくように「トッ」「ドッ」

練習 Paul peach boy bag ten tennis day dog

f v 前歯を下唇に軽くあてて「フ」「ヴ」

s z 舌をあげて歯の間から「ス」「ズ」

練習 four five seven vet six soccer zoo zero

c k 舌を奥に引っ込めてのどの奥から「クッ」「グッ」

g 日本語のときよりも、舌や唇を大きく動かして、思い切って息を出すのがコツだよ!

練習 cat car go good

1枚目は、「いとこ子音」である。これらを最初に持ってきたのにはいくつか理由がある。まず、2つの音が同じ口の形であり、発音の仕方の確認がしやすいことがあげられる。2つの音は有声音と無声音であり、この違いを確認することもできる。また、日本語と違う特徴的な音があり、特に/b//d/などの破裂音は、口や舌を大きく使う練習に良い。それぞれの文字が表す音とその発音の仕方を同時に練習していくが、生徒の実態に合わせて、複数回に分けたり、繰り返したりと使い方は考える必要がある。

人間の耳は母語にない音、自分が言えない音は言語として認識出来ず、単なる「音」として処理してしまう。そのため、発音できない単語は聞き取れない。より正確な発音を意識することは、相手に伝える力だけでなく、聞き取る力の向上にもつながる。

<フォニックスプリント8>

Phonics 8 

基本の音 ee ea ay ai 礼儀正しい母音 共通ルールがあるよ。

ee meet green three week sleepy

ea please teacher season sea

ay day play May Sunday birthday

ai rain train Spain wait

ee ea ay ai は前の () だけ、() で読む。

ルールに沿って読んでみよう

thirteen see sweet beef cheese
street tea dream eat peach Jean
team read easy gray say tray stay
way paint again rail main

<フォニックス練習問題の一部>

Phonics 練習問題 1 

1- () No () name ()

1 子音1 いとこ子音

(1) 単語を聞いて、はじめの文字を○でかこもう。

① (p b d) ② (v s t) ③ (f v g) ④ (p t z) ⑤ (s d c)

(2) 単語を聞いて、終わりの文字を○でかこもう。

① (g b d) ② (d z k) ③ (d s t) ④ (s p s) ⑤ (k p f)

4 母音2

(1) 単語を聞いて中に聞こえる母音の文字がどちらか選び、丸をしましょう。

① (a y) ② (a o) ③ (a i) ④ (o u) ⑤ (a i)

(2) 単語を聞いて、_に入る文字を a e i o u から選んで入れよう。

① m__te ② r__se ③ m__te ④ P__te ⑤ n__ne

10 音のパーツを使って単語をできるだけたくさんつくろう。

(1) 全部を上手く組み合わせると10個の単語ができるよ。

a b d e f h j k l m n o r s t u w
aw ay ee ea ch ir or sh th wh

8枚目の母音ダイグラフのプリントである。右に並んだ既習語から、母音の発音を推測させ、() をうめてルールを完成させる。読みを確認するときは、既習語の復習にもなっているため、意味も確認していきたい。

そして、練習の後、下の□の中の、既習語だけでなく未習語も含む語彙について、読み方を推測させ、読ませてみる。中に含まれる未習語はこのあと、1年生の間に教科書で習うものを選んでいく。

発音や単語の読み方を推測させる場面では、個人だけでなく、ペアやグループで活動することも有効であると考えられる。未習語の意味については、読み方が分かれば意味が分かる単語については、その場で意味を確認することもできる。

文字の発音からこうしたルールの確認まで、9枚のプリントで指導を行っていく。

次に、こうしたルールの定着を確認する必要があると考え、練習問題を作成した。

練習問題は最後の10を除いては聞き取りの問題である。聞こえた音の文字に○をする問題や、文字や書き込む問題であるが、生徒が取り組みやすいように選択問題にし、単語についても、主にプリントから出題している。

生徒の実態に合わせて、テストというよりは、これも活動の一つとして、1~9のプリントと平行して行うことも可能である。解答プリントを作成しているため、ALTに読み上げてもらうもの良い。最後の10の2問はまとめとして、音のパーツを組み合わせ、単語を作る活動を入れた。正しく組み合わせると単語が10個できるようになっている。この活動についてはペアや、グループで取り組ませてみるのも良いと思う。

・スライドの作成

プリント教材とは別にスライドも8種類作成した。こちらは、フォニックスの練習とともに、英語のリズムに慣れることをねらいとしている。日本語の音節がほぼ一定のリズムであるのに対して、英語の音のリズムはいろいろな変化がある。英語は子音+母音+子音の一拍の音節が基本の形であるが、日本語ではそれを3拍で把握しがちである。一拍で読み、語尾の子音の発音が正しくできると、英文をリズム良く読むことができる。英語のリズムを学ぶこともフォニックス学習の目的の一つである。リズムにこだわったので、スライドで使う単語の形が限定され、どうしても未習語が多くなる。そこで、ヒントになるイラストをつけて、楽しんで練習ができるように工夫した。スライドの指導時期は、フォニックスプリントより早く、単語を読む練習を始めた段階から使うことができると考えている。

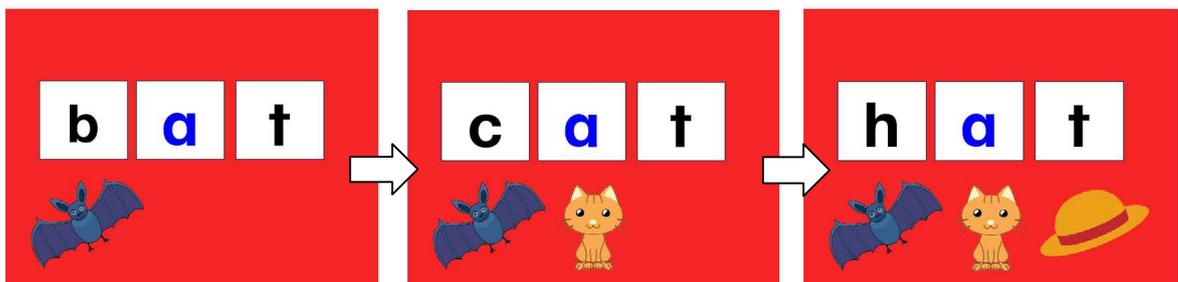
<スライド一覧> C・・・子音(consonant) V・・・母音(vowel)

1, 単音 子音	5, CVC 母音固定
2, 単音 母音	6, CV VC
3, CVC 母音語尾固定	7, サイレント e 母音変化
4, CVC 母音変化	8, 母音ダイグラフ

1, 2は文字ごとの発音練習用, 3~5は英語の音節の基本である子音(C)+母音(V)+子音(C)の形慣れるため3種類用意した。6は今回ルールに入れていないが、読み方が一定の子音+母音と母音+子音の練習。そして7はサイレント e で、子音+母音+子音の形と e をつけたときの読みの変化を練習できるようにした。8は母音ダイグラフで、母音と語尾をそろえてリズム良く練習できるようにした。いずれも一音節で一拍で発音する練習になる。

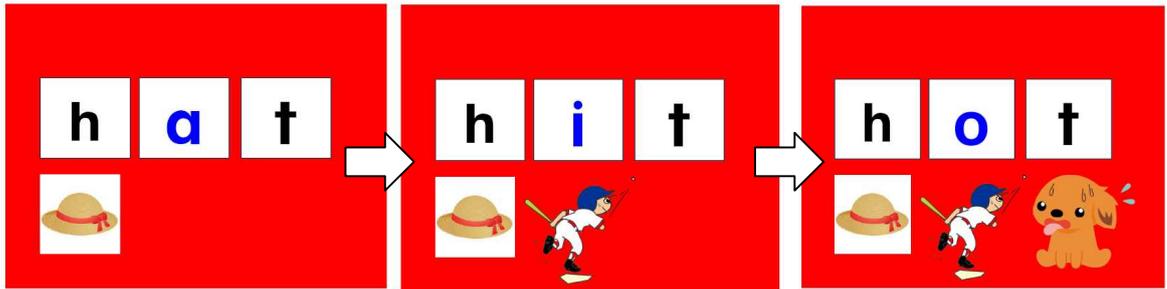
比較的なじみやすい単語で音をそろえていくのは予想以上に時間がかかった。参考書籍や中学校教科書や Hi, friends! の中から見えそうな語彙を探し、ない場合は辞書をアルファベット順に調べて見えそうな語彙を探し、作成していった。

<スライド3 子音+母音+子音 語尾固定の一部>



上のスライドでは、母音と語尾の子音は固定して、最初の子音だけが変化するようにしている。異なる子音に対しての母音の練習が韻を踏む形でリズム良くできるように考えた。これはライミングと言われ、英語のリズムを身につけさせる学習法の一つである。3単語ずつの区切りがわかるようにイラストは前の絵を消さずに増やしていくようにしている。これが母音一つに対して2セット、計10セットで30の単語が出てくる。

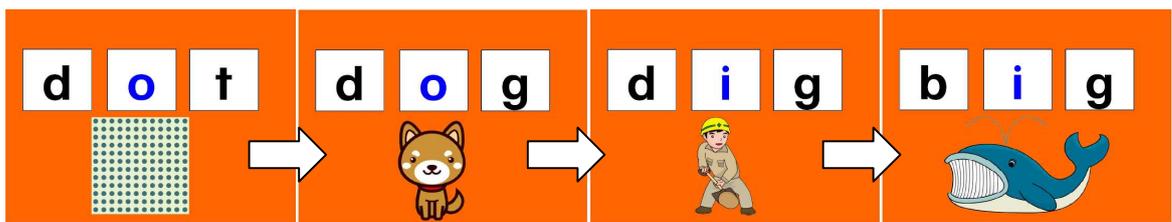
<スライド4 子音+母音+子音 子音固定の一部>



上のスライドは、真ん中の母音だけが変化するパターンである。母音だけを変化させて、3つのリズムが作れる子音の組み合わせを探し、1つの組み合わせに対して3つの母音で、10セット、30単語分を作成した。このパターンでは子音が固定されているので、音と綴りの関係を把握しやすい。母音の発音が変わるのは難しいので、しっかりリズム良く言えるまで繰り返すことが大事である。

次の5では子音が一つずつ変化し母音も3つずつ変化してリレーのように続いていくパターンになっている。

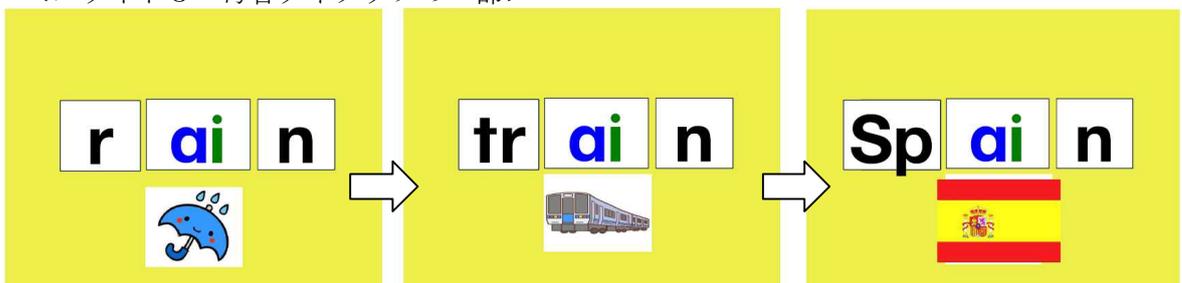
<スライド5 子音+母音+子音リレー 母音固定の一部>



上のように、母音は3つずつ固定、両端の子音の一つずつ変化して15単語リレーしていく。文字を認識してリズム良く発音できようように練習する。

子音での練習のときには、終わりの子音に日本語的に母音を付けてしまわないように意識させることが大切である。

<スライド8 母音ダイグラフの一部>



8は母音ダイグラフのルールを教えたあとの口慣らし練習用である。こちらも最初の音だけが変わる。これらの単語も一音節なので一拍で言えるように、特にtrやSpのような子音の連続には注意させたい。

・フォニックス発音表

個々の文字の音を覚えるためには、日常的に文字の音を意識させる工夫が必要ではと考え、掲示用のフォニックス一覧表を作ることにした。アルファベット順に並べABCを/aɛ/b/k/と発音させる「アブクド読み」も考えたが、発音や子音と母音の区別も意識させたい

と考え、子音と母音を分け、左のような表を作成した。

フォニックス 発音表 1

子音				母音
p	b	t	d	a
f	v	s	z	e
kc	g	l	r	iy
m	n	j	h	o
w	y	x	qu	u
th	ch	sh	wh	ng

発音表1では、基本となるアルファベットの音をいここ子音から順に並べた。また、子音ダイグラフも教科書では比較的早く出てくるので、入れることにした。□は有声音、下線は2つ発音があるもの、cgは違う読み方があるので、色を変えた。それぞれの音を単独で順番に発音させたり、また母音と組み合わせて練習させることもできる。常に授業中掲示して、単語が出てくる度に確認したいと考えている。

フォニックス 発音表 2

明るいアー 暗いアー オー	ar er ir ur or
先読みだけ読む	ee ea ay ai
まなみのアー	aw au al
りほオウアウ	ow ou
ooはオーフ	oo
イア エア	ear air
読まない字 (黙字)	ght

発音表2は母音ダイグラフ中心の表である。こちらの□は発音する方の母音、下線は複数の読み方をするものである。ただし、一番下の黙字の□は発音しない子音である。左側には発音のヒントが書いてある。これも該当する単語が出てきたときに表で繰り返し確認させるよう考えている。子音同様、綴りの塊を意識させることで、音と綴りの関係が把握しやすくなるのではないかと思う。

小学校では、学習した内容が教室の中に掲示されていることが多く、授業と授業の間にも児童が随時内容を確認することができる。できれば中学校1年生の教室等にも日常的にアルファベットやフォニックスを

掲示しておけると、生徒が随時目にすることができ、良いのではないかと考えている。

・アルファベットカードの作成

フォニックス導入の前提として、英語の音に馴染んでいること、アルファベットの大文字、小文字の認識ができていることが挙げられる。ネイティブスピーカーの場合は、小学校入学までに音に慣れ、語彙も身に付いており、文字にも馴染んでいるが、一般的に日本の中学生の場合は、入学時、どちらも不十分な状態である。特に小文字については同じような形のものがあるので、区別がなかなかできないことが多い。

小学校外国語活動では、文字を探す、聞き取る、書き写す等の活動を含むアルファベットの単元はあるが、定着させることが目的ではないとされているので、覚えたかどうかの確認をするわけではない。教材のHi, friends!には切り取って使うアルファベットカードがついている。難しいかもしれないが、できれば、これを中学校に持ち上げられるといいと思う。

中学校でも個人用のアルファベットカードがあれば、順に並べたり、神経衰弱などのゲームをしたりと、覚えるためのいろいろな活動につかえるので、大文字小文字と、フォニク

ス用の絵カードを作った。通常の印刷ブロック体ではiの大文字の横棒がない、小文字の形が違ふ、などということがある。今回使用しているフォントは三省堂の指導書に付属しているもので、生徒の書くブロック体の文字に近く、g, gなどの字体の違いによる生徒の混乱を防ぐことができる。

<アルファベットカードの一部>

A	B	C
D	E	F
G	H	I
J	K	L

まず、このような絵やカードなどを利用して、聞き取る活動や読む活動を十分した後で書く活動に入らないと、読めない文字をいくら書いても覚えるのは難しい。

こうしたカードをパソコン上で作るのは容易なのだが、人数分印刷して切り取る準備が大変なので、新年度が始まる前に

人数分、前もって作成しておく必要がある。

・ローマ字カードの作成

フォニックスの指導の前提として、英語の文字や音に十分慣れていることが必要だが、日本の中学1年生はその点が不十分な状態と思われるので、補う必要がある。その方法の一つとしてローマ字の指導を考えた。

ローマ字はもともとポルトガルからの宣教師が日本語の音をラテン文字（ローマ字）で表記する方法を考えたことが起源である。小学校3年生で訓令式を中心に読み書きの学習をしているが、中学校英語科ではヘボン式ローマ字を扱うので、確認が必要である。小学校外国語活動の教材ではローマ字は扱われていない。中学校の英語の指導要領にはローマ字についての記述はなく、ヘボン式ローマ字は教科書では巻末に紹介する程度である。英語を学習する中でローマ字は欠かせないのだが、今後小学校での英語の教科化の議論の中でも、ヘボン式ローマ字にどのタイミングで習熟させるのかは、はっきりしていない。

ローマ字の読み方をしっかり復習することで、母語である日本語をヒントに、個々の文字がアルファベットの名前とは別の音を持つことや、子音と母音の区別を学ぶことができ、英語学習の導入として役立つのではないかと考えた。そこで、全音の綴りの確認のための50音表と、楽しんでグループやペアで学習できるようカード教材をいくつか作成した。

<ローマ字（ヘボン式）50音表>

ローマ字(ヘボン式)

	a	i	u	e	o			
k	ka	ki	ku	ke	ko	kya	kyu	kyo
s	sa	shi	su	se	so	sha	shu	sho
t	ta	chi	tsu	te	to	cha	chu	cho
n	na	ni	nu	ne	no	nya	nyu	nyo
h	ha	hi	fu	he	ho	hya	hyu	hyo
m	ma	mi	mu	me	mo	mya	myu	myo
y	ya	-	yu	-	yo	-	-	-
r	ra	ri	ru	re	ro	rya	ryu	ryo
w	wa	-	o	-	n	-	-	-
g	ga	gi	gu	ge	go	gya	gyu	gyo
z	za	ji	zu	ze	zo	ja	ju	jo
d	da	ji	zu	de	do	-	-	-
b	ba	bi	bu	be	bo	bya	byu	byo
p	pa	pi	pu	pe	po	pya	pyu	pyo

ローマ字(ヘボン式)

	a	i	u	e	o			
k								
s								
t								
n								
h								
m								
y		-		-		-	-	-
r								
w		-		-		-	-	-
g								
z								
d						-	-	-
b								
p								

ペンマンシップ等でも中学生用は50音全てを記入できる形式のものはあまりないので、確認ができるように作成した。左の表を最初に持たせてカード等で読みの復習や練習を十分したあと、右の表に書き込んで確認させたいと考えている。

<ローマ字カード>

・都道府県名と県庁所在地

Hokkaido	Iwate	Miyagi	札幌	盛岡	仙台
北海道	岩手	宮城	Sapporo	Morioka	Sendai
Akita	Yamagata	Fukushima	秋田	山形	福島
秋田	山形	福島	Akita	Yamagata	Fukushima

小学校で学習した県名と県庁所在地の組み合わせである。カルタのように取らせたり、神経衰弱やばば抜きなどいろいろなゲーム形式で使うことができる。組み合わせると社会科の復習にもなる。

・大分市内の小学校名

金池	長浜	荷揚町
Kanaike	Nagahama	Niagemachi
中島	住吉	大道
Nakashima	Sumiyoshi	Omichi

大分市内の小学校名のカードである。自分の通っていた学校や近隣の学校以外で、漢字の読み方が難しいものもあるかもしれないが、社会体育の活動などで小学校を多く知っている生徒に活躍の場があるかもしれないと考えた。数が多いので、学校を絞って活動に取り入れたい。

・身近な物や生き物

kangoshi	tampopo	akachan
		
ki	tsukushi	kappa
		

生徒が知っている身近な日本語についてのカードである。ローマ字の特に shi などのヘボン式の表記やつまる音の表記など生徒にとって難しいと感じやすい表記が入るものを入れ、54語分を作った。固有名詞ではないこの表記では先頭が小文字になるので、小文字の認識をさせることもねらいである。

まず自分たちでローマ字と日本語や絵のカードを合わせるマッチングからスタートすると、ゲームの前にカードにどのような言葉があるのかが分かり、取り組みやすくなる。神経衰弱のゲームは英語が得意でなくても、イメージを記憶することが得意な生徒が活躍することも多く、語彙を工夫することで、様々な生徒に興味を持たせるのに良い方法である。

③ 1学期の指導計画作成

フォニックスに関わるここまでのいくつかの教材を、1学期のどのタイミングからどのように指導するか、教科書の内容とも合わせて整理してみることにした。指導内容を、アルファベット、ローマ字、フォニックス、テスト、教科書に関連する授業の内容の4項目に分け、4月から9月までのフォニックスを中心とした指導の流れを組み立てた。

音声と文字をつなげる読む力の基礎を養うための指導の流れ 中学校1年生 一学期 (三省堂 New Crown1)

	4月	5月	6月	7月	8月	9月	
アルファベット	・アルファベットカード 名前,文字の書き方	<div style="border: 1px solid black; padding: 5px;"> ・生徒が英語の音声聞く、また、口にする時間を授業時間の半分以上にする ・書く練習はできるだけ家庭学習にする </div>			音読や暗唱を課題に含める	フォニックスルールの復習	
ローマ字	・ヘボン式ローマ字 ・地名・人名・物の名前						
フォニックス		・フォニックス発音表 単音の発音方法	・フォニックススライド ダイグラフの発音方法	・フォニックスプリント学習			
テスト	・アルファベット ・単語聞き取り	・ローマ字(読み)	・単語・英文テスト				
教科書	音声中心 会話活動を多く取り入れる 単語・アルファベット	Lesson1(音声中心) 数字(音声中心) ・単語の読み方	・Lesson2(読み方) 曜日・教科 ・Lesson3 季節・月の名前	・Lesson4 Word Corner			
基本の流れ	<div style="border: 1px solid black; padding: 5px; width: fit-content; margin: 0 auto;"> 聞いて分かる → 言える → 読める → 書ける → 使える </div>			<div style="border: 1px solid black; padding: 5px; width: fit-content; margin: 0 auto;"> 単語・英文を塊として覚える → 単語を読む → 単語の意味を理解する → 文の構造を理解する </div>			

まず、学習の流れの基本として「聞いて分かる⇒言える⇒読める⇒書ける」ということを意識しておくことが、小学校外国語活動からの接続をスムーズにするという点からも必要である。

その上で、4月からアルファベット、その後フォニックスの単音とローマ字の復習を経て、フォニックスルールの学習に入るよう計画している。夏休みまでにフォニックスプリントを終え、音読や暗唱を課題として出すことで、生徒が英語の音から離れないようにさせる。その上で、2学期にまた復習をし、文法の難しくなる2学期に備えさせる。

テストという項目についてであるが、1学期の中間テストが実施されない学校が多く、期末テストまでが長い。テストのやり方も、まず「言えるか」、「聞き取れるか」の確認のようなテストから、少量ずつ丁寧に定着させるべきだと考えている。その後6月から導入している単語・英文テストを実施することで語彙力の向上を図りたい。この単語・英文テストについては、1年生64回、2年生56回、3年生54回、の174回分のプリントを作成した。併せて授業での音声活動を増やすために、文法のまとめ部分の日本語と英語をセットにした音読練習プリントも3年間計27回分を作成していた。2学期からは3学年共通問題の100問ずつの単語テスト「英単オリンピック」を計3回実施することで、語彙力の向上に弾みをつけようと考えている。

6 今後の課題

「読めない単語は書けない」「言えない単語は聞き取れない」。音と文字をつなぐ、中学校1年生の1学期の学習ではこの点を踏まえた上で、「言えているか」「読めているか」が鍵となる。今回作成した小学校外国語活動の教材と中学校の教科書の学習内容に沿ったフォニックス教材を活用することで、英語の音と綴りの関係を理解させ、語彙習得に不可欠な読む力の基礎を養っていきたい。

次に課題として考えないといけないのは、小学校外国語活動との連携である。小中のスムーズな接続を考える上で、現行指導要領の範囲内でも小学校で英語の音や文字に触れる機会を増やす様々な工夫が可能であり、また必要ではないかと感じている。音と綴りの学習について小学校から中学

校への流れのある指導計画を組み立て、実施することができればと考えている。

7 おわりに

2020年度の正式な教科に向けて2018年度から小学校英語科の新指導要領が段階的に先行実施される計画となっている。それにもなつて中学校の指導内容も大きく変わる。今、英語科は大きな変化の時代を迎えている。こうした中では教員が常に学び続ける柔軟な姿勢を持つことがより大切になると考える。学ぶ側に「学問に王道なし」というのであれば、指導する側にも「王道」のような絶対的な方法はなく、日々研鑽と実践を積み重ね続けていく必要があるのだと思う。

一方で、技術の進化に伴って、教育現場でもデータの共有は以前よりずっと簡単になった。共に教材や指導法について研究し、分担して作成、そしてそのデータを共有するような仕組みを作ること、個々の負担を減らすとともに、教材研究の質が高まるのではないかと思う。

今回、貴重な研修の機会をいただくことができ、改めてじっくり3学年分の教科書の内容を見る時間ができたことで、教材の流れについても全体を俯瞰するイメージが持て、フォニックスの研究とともに、自分のこれまでの授業スタイルについての見直しをすることができた。

今回の音と綴りの関係についての実践を現場で行い、内容について検証するとともに、現場の教員に環流する中で、教材や指導について一緒に検討し、共有していく協働体制ができていけばと考えている。今後も英語学習が子どもたちにとって、より楽しく力のつくものになるよう努力していきたい。

8 参考文献

文部科学省 学習指導要領解説 中学校外国語科			2008
「英語教師のための第二言語習得論入門」	白井恭弘	大修館書店	2012
「外国語学習の科学」	白井恭弘	岩波新書	2008
「英語の構造」	小野隆啓監修	金星堂	2004
「文字の言語学 現代文字論入門」	フロリアン・クルマス	大修館書店	2014
「英語習得の「常識」「非常識」	白畑知彦	大修館書店	2004
「小学校英語の教育法 理論と実践」	アレン玉井光江	大修館書店	2010
「英語授業ハンドブック 中学校編」	金谷憲	大修館書店	2009
「英語音読指導ハンドブック」	鈴木寿一・門田修平	大修館書店	2009
「協同学習を取り入れた英語授業のすすめ」	江利川春雄	大修館書店	2012
「生徒を英語好きにする入門期の活動55」	大塚謙二・胡子美由紀	明治図書	2012
「This is phonics1,2」	粕谷みゆき／金子由美	mpi	2012
「Active Phonics」		mpi・正進社	2001
「フォニックスってなんですか」	松香洋子	mpi	2008
「英語のフォニックス」	竹林 滋	ジャパントイムズ	1981
「英語音声学入門」	竹林滋	大修館書店	2008
「フォニックス発音トレーニング book」	ジュミック今井	アスカ	2005
「田尻悟郎の楽しいフォニックス」	田尻悟郎	教育出版	2006
「アメリカの小学校ではこうやって英語を教えている」	リーパーすみ子	径書房	2008